

● 最優秀賞

生徒の自己学習力を育成するための 英語学習の工夫について

奈良県北葛城郡河合町立河合第一中学校 たてまつだいすけ
立松大祐

1 はじめに

本校は奈良県の北西部に位置し、1年生が3クラス、2・3年生は2クラスずつで構成される比較的小規模の公立中学校である。

昨年度、本校に赴任し3年生の2クラスと2年生の1クラスの英語の授業を担当することになった。今年度になり、再び3年生を2クラスとも担当する機会に恵まれた。クラス替えは行われたが、3年生の半数の生徒は昨年度からの付き合いとなり、残りの半数の生徒とは新たな出会いとなる。普段の授業では英語の4技能(listening, speaking, reading, writing)の指導を通し、英語をコミュニケーションの手段として積極的に学ぼうとする意欲の育成と、自ら英語学習を続けることができる自律的な学習者を育成することに主眼を置いている。

本稿では、現3年生に対して昨年度から適宜変更を加えながら行なっている、一人ひとりの自己学習力を育てるための取り組みの途中経過を報告し、その成果や課題を考察したいと考えている。

2 昨年度から始めた取り組みより

2年生はわずか2クラスであり、本来ならば1人の教員が両クラスとも担当するところであったが、校内の事情により、筆者とベテラン教諭の2人で1クラスずつ英語の授業を担当することになった。2人とも転勤してきたばかりで、学校の様子ならびに生徒たちの

様子をよく分からないまま4月をスタートした。そのような暗中模索の状態であったので、授業が終わるたび、または放課後に、お互いが教室で感じとることができた生徒の実態や課題を職員室や廊下などで情報交換するのが常となっていた。

それぞれの観察や話し合いから、本学年の特徴として少数の生徒は授業中においても個性を思う存分発揮することができるが、大多数の生徒はおとなしく振舞っていることがあげられた。しかしながら、その静かさ、おとなしさという姿は、熱心に教師の言葉を聞き授業に取り組もうとする生徒だけではないことが明らかになってきた。ノートや教科書に落書きをしたり、自信がなさそうに身体を固くしたり、無気力に天井や外を眺めたりする生徒が少なからず存在していたのである。

また、もうひとつの状況として、これからの英語学習において基礎となるべく中学校1年生時の学習事項の習得が不安定な生徒も目立つことが挙げられた。特に、口頭での活動や発表が要求される場面では、予想していた以上に困難さを伴っていた。

そこで、なぜそのような状況が生まれてしまうのか、また、これらの生徒に対してどのような方策をとることが有効であるかを議論した。まずは、授業の中で実際に英語を使って行う活動が少ないことが指摘された。すなわち、英語の音声聞き、コミュニケーション活動などをとおしてクラスメートと英語でやりとりをすることが少ないのである。また、英語の学習をしたがっている生徒は潜在的に

多くいるのにもかかわらず、どのように学習を進めていけばよいのかという方法を生徒に示していないことも指摘された。

このような課題を踏まえ、授業中にはできるだけ多くの教室英語やコミュニケーション活動を取り入れることを2人の教員間で確認をした。たとえ擬似的なコミュニケーション活動であっても、実際に英語を使用する機会や時間を増やすこと、またそれを可能にするための授業を再構成することが重要であると考えた。それに加え、自ら英語の学習を継続して行くことのできる学習者を育てる方策を協議した。次に示す実践例は、生徒の自己教育力を高めることを目的に始めた取り組みである。

(1) Gemノート

Gemノートは、授業用のものとは別に生徒に持たせているもので、生徒それぞれが自分の意思で自由に使えるノートのことである。Gemとは「宝物」という意味であり、同僚の教員が名付け親である。そのノートには好きな英語の歌詞や映画のセリフ、外国人タレントに関すること、英文日記や英単語の練習など英語に関することなら何を書いてもよいことになっている。英語を使って自分の興味や関心のあることをどんどんノートにためていくという経過と結果が、生徒それぞれにとっての「宝物」になってほしいという願いが詰まっている。

実際にそのノートの使い方や目的を生徒に説明すると、説明している側にとっては驚くほどの反響があり、潜在的に英語の学習をしたい、英語を使って何かをしたいと願っている生徒が多くいることが分かった。やはり、生徒は「学びたい」と願っているのだと、改めて痛切に認識させられ、「これで何かが変わる」という思いで胸が高鳴ったのであった。以降、授業が終わるたびに多い時には10人以上の生徒がノートを提出するために教卓まで

やってくるようになった。その中の多くは必ずといっていいほど、「先生、このノート絶対に今日中に見て返してな。また書いてくるから。」とか、「これ見てくださいよ。こんなにもいっぱいがんばってきてんから。」と、笑顔で言ってくるのである。また、そういう積極的にノートを提出する友だちの姿を見て、「先生、久しぶりにがんばって書いてきたから。」と、一度も提出したことなかった生徒が、目を輝かせてノートを提出してくれるようにもなってきた。

このように着実に努力を楽しむ始める生徒が出現する一方で、年間を通して一度もノートを提出しない生徒もいたことは事実である。Gemノートの性格上、ノートを提出するかしないかについては個人の自由に任されているので、すべての生徒に提出を求めるという方法は望ましくないと考えている。しかしながら、そのような生徒は心配であるし、学校の授業以外でも英語に興味を持って学習してもらいたいと願ってしまう。そこで、提出できない生徒には、頻繁にノートを提出している生徒が何を書いているのかを知らせるなどして、その多様な内容から自分に合った自学自習の方法について気づきをもたせようとしている。

(2) 毎月の歌

生徒にはできるだけ多く英語の音声に触れてもらいたい、歌うことで楽しく英語を学習するきっかけにしてほしいという思いで始めたのが、「毎月の歌」の取り組みである。「毎月」ということなので、当然のことながら月ごとに曲目が変わるのである。選曲作業は楽しいものではあるが、同時に、頭を痛めるところでもある。なぜなら、あまりにスローテンポで、なおかつ、生徒の多くが幼稚であると感じそうな曲については、いくら歌いやすかろうが避けなければならない。そのような曲を生徒に与えることは、彼らの知的な向上

心や困難なことに挑戦しようという心を損なうようである。その結果、大きな声で歌ったとしても、どこかしらけた空気が教室に漂うことになる。彼らは、実際に曲を聞き、「ちょっといいな」、「コマーシャルなどで聞いたことがある」、「かっこいい」などと感じることができれば、スピードが少々速く、また全員で声をそろえて歌うのは困難と思わせる曲であっても、熱心に歌おうとするのである。選曲をする際に考慮していることがもうひとつある。それは、その歌詞にこめられているメッセージである。教育の場であるから、暴力的な表現やスラングなどが多く見られるものは適切ではないと考えている。平和を祈るもの、生き方を問うもの、人権や人間愛などについて考えさせるメッセージを含むものを選ぶようにしている。

授業では、最初に声を出してよい雰囲気を作り出したいので、開始直後に歌うことにしている。月の初めは新曲になることもあり、遠慮がちの声が教室を支配するのであるが、月末にかけては状況が変わってくる。生徒それぞれが声の大小はあるものの、自分の声で歌えるようになってくるのである。そうすると、どこからともなく「もう一回!」という声が出てくるのである。また、「来月の曲は何にするんですか」というような質問も出てくるようになってくる。このことは、歌を歌うことが生徒の英語学習の方法のひとつとして確かに位置づけられた証拠であるとみることができるであろう。

(3) 英語絵日記

この取り組みは夏休みの宿題として課したもので、生徒は長い休みの中から3日間だけを選び絵日記を書いてくるのである。この課題を生徒に紹介したところ、日本語で日記を書くことが少なくなっているだけに、それを英語で書くことに困難さを感じていたようである。そこで、1年生の後半から過去時制に

ついて学習していること、教科書の英文を真似ることから始めればよいことを示した。それに加え、書きあげた日記は作品として全員の分を2学期の最初に開催される文化祭で展示することを告げた。つまり、自分の日記が多くの人に読まれる可能性があるという意識を持たせたのである。結果として、このことが生徒を刺激することにつながり、努力の跡が大いに見られる目にも鮮やかな力作を文化祭で披露することができた。他者の目を意識して学習するということが、質の高い学習結果を残すことにつながったと考えられる。

展示場では、全学年の生徒に加え、保護者の姿も数多く見られた。特に当該学年の生徒たちは友人の作品を中心に見てまわり、あちらこちらで歓声をあげ、驚きの声をあげるなどしていたのが印象的であった。他の作品を見ることにより、自分自身の振り返りをし、学習を深めた瞬間であったように思う。

(4) インタビューテスト・音読テスト

学習指導要領が求めるように、中学校では特に「聞くこと」と「話すこと」に重点を置き、実践的コミュニケーション能力を育成すべく日々の授業に取り組んでいる。しかしながら、とりわけ「話すこと」の評価については、実施方法や評価方法の困難さから、コミュニケーション活動中における観察でのみしか実施してこなかった事実がある。

また周知のとおり、絶対評価の導入に伴い、生徒の英語の「話す」力を測るためには、実際に英語を話す機会を設定し、それを評価することが当然であるという機運がますます高まってきている。本来ならば、絶対評価導入以前からこのような視点で授業と評価が行われていなければならない。実施困難性などの理由をつけ、オーセンティックという視点からの評価方法を避けてきた教師の姿勢は反省せねばならないところである。

そこで、本校においてはALTと1対1の

会話を「インタビューテスト」を2学期に実施することを計画した。テストの内容や実施方法、留意事項についてはO'Malley & Valdez Pierce (1996) を、評価規準の作成に当たっては教育課程研究センター (2002) と ACTFL (1986) をそれぞれ参考にALTと協議しながら考えた。資料1が実際のテストで使用した評価用紙である。

Assessment Card for Oral Interview Test

Class:

Student's name:

Assessment Criteria	Rating		
	A	B	C
Speaks with no hesitation (言語活動への取組)	Always	sometimes	rarely
Sustains communication (or uses communication strategies) (コミュニケーションの継続)	Always	sometimes	rarely
Masters the target grammatical structures (正確な発話)	competent	moderate	limited
Uses English appropriate to context and intention. (適切な発話)	very well	okay	not very well
Speaks clearly and loudly (適切な発話)	very well	okay	not very well

●資料1 / インタビューテスト評価用紙

生徒にとっては初めてのインタビューテストであるので、不安感を軽減するため、テストの目的や実施方法ならびに評価方法を説明した。相当に混乱し教室中に動揺が走ることが予想されたが、生徒は比較的落ち着いてテストの提案を受け入れてくれたのである。次に、事前にテストで尋ねられる内容の一部を示し、対策練習のための時間を設けた。

テストは個室で行われ、ALTは前もって相談して決めておいた質問事項を中心に生徒と会話をするのである。時間は1人3～5分程度で行われ、会話はビデオカメラで録画され、後の評価作業の際に活用される。評価はビデオを見ながら、ALTとの話し合いの上で決定するという方法をとった。かなり時間がかかる方法ではあるが、妥当性と信頼性のある評価をするためには必要であると考えたからである。

テストの順番を待つ多くの生徒は、友だちと模擬面接のような形で質問と応答のやり取りを和気あいあいと行っていたが、その一方

では緊張で表情が固まってしまう者や頻繁にトイレに行くことを訴える者も現れた。しかしながら、テストが終わると、みな駆け足で安堵の笑顔を浮かべて教室に戻ってくるのである。そこではテストの様子について情報交換が行われたり、感想や反省を述べ合ったりしている。Hughes (2003) は、生徒は「話すこと」が評価されるということが体験的に分かると、さらに「話すこと」の学習に意欲的に努力しようとする波及効果が期待されると指摘している。まさに生徒にとっても教師にとっても今後の授業のあり方についてインパクトと波及効果のある評価活動になった。

次に、昨年度3学期と本年度1学期に行った音読テストについて報告する。

音読テストとは、教科書の指定した部分を生徒が音読し、それをALTと共に評価をする活動である。生徒は教師の前で音読するのではなく、事前に配られたカセットテープに音声を録音し決められた期日までに提出するのである。そうすることによって、授業では最小限の練習時間を確保するだけでよいし、また生徒にとっては家庭で十分に練習する時間を作れるのである。また、録音機器を持っていない生徒については、あらかじめ順番表を作成し、決められた時間内で学校にある機器を利用して録音できるようにした。

音読テストの評価用紙についても、インタビューテスト時と同じくO'Malley & Valdez Pierce (1996)、教育課程研究センター (2002)、ACTFL (1986) を参考に作成した。一番大きな相違点は、このテストは生徒のスピーキングではなく「読むこと」を評価するという点である。また、インタビューテスト時の反省に基づき、評価用紙を日本語表記として生徒にとって評価の内容を分かりやすいものとした (資料2)。加えて、メモ欄を作り、ALTからの助言や提案を個々の生徒に伝えるようにした。この用紙をテストの告知と共に配布し、何を評価されるのか、また、どういう基

Reading test(音読テスト p.16)評価用紙

Class () Number () Name ()

評価

評価項目	Rating		
	A	B	C
単語を正しく読んでいる。	母語話者に近い。	日本語の影響はあるが、時折母語話者のような発音も見られる。	日本語の影響が強く、理解不能のこともある。
場面を意図して適切に表現している。	登場人物や状況に適切である。	時折ぎこちない部分もあるが、おおむね適切である。	ぎこちなく不自然な部分が多い。
音の強弱、イントネーション、区切り、リズムが正確である。	ほとんど母語話者のように、スムーズで滞ることがない。	時折ゆっくりになるが、時に母語話者のように発音する。	ゆっくりで、滞ることがあり、長いポーズを置く。
【自己評価】 積極的な練習。	A 毎日何度も読む練習をした。	B 毎日というわけではないが、熱心に練習した。	C たまに練習をした。

Memo
Please try to be careful of your pace. You need to use more pauses.
be careful of pronunciation:
"five" sounded like "high"

●資料2/音読テスト評価用紙

準で判断されるのかということをお知らせし、生徒に知らせておいた。これにより、生徒は評価される項目に焦点をおいて、つまり目標を持って学習することができるのである。

生徒それぞれに評価用紙が返却されると、A・B・Cの評価にはずいぶんと一喜一憂したようであった。それに加え、一部の生徒にとってはALTからの具体的なコメントの方により関心を持っていたようだった。このことは学習の質や成果に意識が向かい始めている兆候と捉えられるのではないだろうか。

3 本年度から始めた取り組みより

昨年度からの取り組みは、自己教育力を高め、生徒も教師も共に変わろうとするための取り組みであったように思われる。生徒は英語を学習することの楽しさと同時に厳しさも感じる事ができたように思う。なぜなら、生徒は従来の紙と鉛筆だけのテストに加え、英語によるインタビューテストや音読テスト

を経験することにより、英語の「実技」に対して本気で努力せざるを得なくなったからである。また教師は、新しい時代に求められる英語の力を自ら育てようとする自立した学習者を育てるため、自らも英語学習者の一人として自己変革ならびに授業の変革を迫られたのである。

本年度は、さらに生徒一人ひとりの英語の力と自己教育力を育てるため、昨年度からの実践に加えて次のような取り組みを導入することにした。

(1) ペア学習とシャドーイングの導入

一斉指導による教室内のI-R-E構造を継続していくことは、生徒のコミュニケーション能力を育てるためには大きな壁となるように感じるようになってきた。そこで、教室内のコミュニケーション構造を変え、生徒間で生まれるコミュニケーションを重視するために「英語ペア」を新たに作ることにした。4月当初は、隣の席に座っている生徒同士でペアを組んで学習を始めた。ところが、生徒間の微妙な人間関係などの原因により期待していたほどの大きな変化は生まれなかった。そこで、5月の中間テスト終了後に新たにペアを作り直すことにした。中嶋(2000)はペア学習について、互いに間違いを許し合い、違いを認め合う心地のよい環境であるべきと指摘している。心地よく学習できる関係づくりを意識して、生徒には次のように指示をした。「この子となら気持ちよく、楽しく学習できるという相手とペアになりなさい。できれば、英語は苦手だと思っている人は得意だと思っている人とペアを作りなさい。」この方法を採用することにより、ペア学習の雰囲気は大きく変化したのである。厳しくも温かい様子で助け合い、励ましあう姿が教室のあちこちで生まれるようになった。

ペア学習において生徒を最も集中させているのは教科書をシャドーイングすることであ

る。シャドーとは影のことである。つまり、一方の生徒が教科書の英文を音読するのを、もう一方の生徒は数秒遅れて聞こえてきた英文を影のように追いかけて再生するのである。教科書は1年生のものから始め、2学期には2年生のものを使用している。追いかける側の生徒は教科書を見ずに、ただ自分の耳だけを頼りに英語の音を繰り返すのでつい一生懸命になってしまう。だからこそ、相手が小さい声で読んでしまうと聞き取れないので大きな声で読むように要求する。そうすると、その現象が教室中に広まり、ついには隣のクラスからクレームがつくほど教室に英語の音声が響き渡ったのである。この活動を特別な事情がない限り、「今月の歌」の後に3分間だけ行っている。生徒にとってはこの流れが「お決まりの」順番となっているので、指示をするのが遅れてしまうと、「今日、シャドーイングは？」などと言われてしまう。

この活動を続けていく中で、印象的な生徒の存在がある。A君は英語が苦手であり、1年生の教科書を音読するのにも困難を抱えている生徒である。パートナーのB君から力の限りの助けを受けながら、何とかがんばれる日々が続いた。ある日、授業で教科書の音読をする場面があり、1人、2人と指名をして音読をさせていた。3人目にA君を指名したのだが、教科書に振り仮名をつけることなく、すらすらと読んで見せたのである。このことにはかなり大きな驚きと喜びを感じた。取り組みの効果が始まったのである。

(2) 基本文練習帳と定期テストの 振り返りシート

ペア学習を利用した学習集団づくりの次に意識をしたのは、生徒に自学自習をできる機会を与えることであった。そこで、既習の文法項目の定着をねらい、各文法項目につき3～4文ずつの英文で構成される「基本文練習帳」と名づけたプリントを配布した。そのプ

リントには大きな声で音読すること、音読しながら3回以上書くこと、日本文を見て英文を言えるようになること、という学習方法を提示し、自学自習しやすいように配慮した。

次に導入したのが、「定期テストの振り返りシート」である。定期テストなどを返却した場合、生徒の多くは得点にのみ関心を持ってしまいがちである。しかし、本当に大切なことは、何ができて何ができなかったのかを知ることなのである。これまでは教師側の資料として記入をしていたものを、生徒が記入し自分の学習状況や成果を振り返ることができるように作り変えたのが資料3である。先述のA君は1学期中間テスト時には、「自分に自信のつくように勉強したい」と書き留めていた。また、その他の生徒も自分なりに振り返りを行い、学習の方法や成果を分析しようとしていることが伺える。

1学期期末テスト 振り返りシート			
Class () Name ()			
番号	内容	得点	自己評価(○△×)
1		16 / 10	○
2	リスニングテスト	4 / 8	△
3		3 / 4	△
4	発音	3 / 4	△
5	手紙文、読解・英問英答	10 / 12	△
6	6月の歌(2行・感想)	2 / 4	×
7	読本文(助動詞・未来・文型)	4 / 8	×
8	並べかえ(現在完了)	8 / 8	○
9	対話文での文法問題(現在完了)	8 / 8	○
10	受身形の復習	8 / 8	○
11	電話での会話(重要な表現)	2 / 8	×
12	長文問題(読解・語句)	11 / 18	×

今回のテスト勉強についての反省
 テストの前まで勉強していたけど、テストで出たこと
 ぶっとた。覚えてしまったところがあった。
 もっと基礎に勉強したいと思う。
 私はこれから夏休みにかけて、このような努力をしようと思います。
 英問英答をもっと覚えようようにしたいと思う。
 電話の会話でできるようにしたい。

●資料3/定期テスト振り返りシート

4 まとめ

ここまで、生徒の実状・実態を考慮に入れ、変化を求めて試行錯誤を繰り返しながら取り組んできたことの一部をまとめてみた。それぞれの取り組みは、ただそれだけでは特別なものとは言えないが、これらすべては生徒の自己教育力を育成するためという視点で始めた取り組みである。そういった意味においては首尾一貫性のある実践を始めていると考えられる。主観的ではあるが、学習に取り組む生徒の様子もずいぶん変化してきている。しかしながら、さらなる授業の工夫とともに低学力にあえぐ生徒への取り組み、また、実践を検証するための質的・量的データの蓄積等の課題も存在する。今後はますます生徒の力を借りながら、持続的に実践と考察を繰り返し、すべての生徒に満足感を与えられる取り組みをしていきたいと願っている。

〈参考文献〉

American Council on the Teaching of Foreign Languages (ACTFL). (1986). *ACTFL Proficiency Guidelines*. Hastings-on-Hudson, New York: ACTFL Materials Center.

Hughes, A. (2003). *Testing for Language Teachers (2nd edition)*. Cambridge: Cambridge University Press.

O'Malley, J.M., & Valdez Pierce, L. (1996). *Authentic Assessment for English Language Learners*. Addison-Wesley.

教育課程研究センター(2002)「評価規準の作成、評価方法の工夫改善のための参考資料(中学校):評価規準、評価方法等の研究開発(報告)」

佐野正之(編著)(2000)『アクション・リサーチのすすめ:新しい英語授業研究』大修館書店

中嶋洋一(2000)『学習集団をエンパワーする30の技』明治図書